

Profile



漆原啓子 Keiko Urushihara (ヴァイオリン, Violin)

日本を代表するヴァイオリニスト。2021年にはデビュー40周年を迎えた。1981年東京藝術大学付属高校在学中に、第8回ヴィニャフスキ国際コンクールに於いて最年少18歳、日本人初の優勝と6つの副賞を受賞。その翌年、東京藝術大学入学と同時に本格的演奏活動を開始。1986年、ハレー・ストリング・クアルテットとして民音コンクール室内楽部門で優勝並びに斎藤秀雄賞を受賞。これまで国内外でのツアーの他、TV出演、海外主要音楽祭、マスタークラスなどに多数出演。また、V.スピヴァコフ、E.ルカーチ、J.ビエロフラーヴェク等の指揮者や、ハンガリー国立響、スロヴァキア・フィル、ウィーン放送響等のオーケストラと共演し賛辞を浴びた。CDは数多くリリースしており、J.S.バッハの無伴奏CD(日本アコースティックレコーズ)がレコード芸術特選盤に選ばれた。また、漆原朝子との録音「無伴奏ヴァイオリン・デュオ」(日本アコースティックレコーズ)は文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を受賞。2017年に

は、ヤコブ・ロイシュナーと「モーツァルト:ヴァイオリンとピアノのための作品全集」をリリースし、レコード芸術特選盤に選ばれた。漆原啓子を中心となり結成した「ひばり弦楽四重奏団」では、ベートーヴェン弦楽四重奏曲の全曲演奏を活動の主軸とした長期プロジェクトを開始。常に第一線で活躍を続け、安定した高水準の演奏は音楽ファンのみならず、指揮者、オーケストラ・メンバー等の音楽家の間でも非常に高い信頼を得ている。現在、国立音楽大学客員教授、桐朋学園大学特任教授。 オフィシャルサイト <https://urushihara-keiko.com/>



野平一郎 Ichiro Nodaira (作曲・ピアノ, Composition/Piano)

東京藝術大学、同大学院修士課程作曲科を修了後、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に学ぶ。ピアニストとしては内外のオーケストラにソリストとして出演する一方、多くの国際的な名手たちと共演し、室内楽奏者としても活躍。古典から現代までレパートリーは幅広い。近年はコンチェルトの弾き振りや、自作自演を含めた指揮活動も多い。150曲に及ぶ作品の中には、フランス文化庁、アンサンブル・アンテルコンタンポラン、IRCAM、国立劇場からの委嘱作品があり、近作では「祝典序曲」(ケント・ナガノ指揮/モントリオール響)、『触知できない領域〜チェロとピアノのための〜』(チェロ:堤剛)、『管弦楽のための「時の歪み」』(杉山洋一指揮/東京都交響楽団)、室内オペラ「亡命」(サントリーホール)、NHK交響楽団との3回に亘る新作発表のプロジェクト「シズオカ・トリロジーI“記憶と対話”」「同II“終わりなき旅”」「同III“瞬間と永遠の歌”」(野平一郎指揮/NHK交響楽団 静岡

グランシップ)など、いずれの作品も圧倒的な成功を収めた。第13回中島健蔵音楽賞(1995)、第44回、第61回尾高賞、芸術選奨文部大臣新人賞、第11回京都音楽賞実践部門賞(1996)、第35回サントリー音楽賞(2004)、第55回芸術選奨文部科学大臣賞(2005)、日本芸術院賞(2018)、第52回ENEOS音楽賞洋楽部門本賞(2022)受賞。2012年春、紫綬褒章受章。2021年より3年間モナコ・ピエール皇太子財団音楽評議員を務める。仙台国際音楽コンクールピアノ部門審査委員長。現在、静岡音楽館AOI芸術監督、東京文化会館音楽監督。東京藝術大学名誉教授、2023年4月より東京音楽大学学長。オフィシャルサイト<https://ichironodaira.jp/>



漆原啓子デビュー40周年記念 Vol.3

漆原 啓子 & 野平 一郎 デュオ・リサイタル

Keiko Urushihara & Ichiro Nodaira Duo Recital

2023年3月11日(土) 14:00 開演

会 場/東京文化会館 小ホール

14:00 p.m., Saturday, March 11, 2023 at Tokyo Bunka Kaikan Recital Hall

Greeting

デビュー40周年シリーズも第3回目を迎える事となりました。最終回「フランス編」は、私が最も尊敬する音楽家の一人 野平一郎先生をお迎えしての演奏です。

長年フランスでご活躍されていらっしゃいました野平先生と共に「いつかフランス音楽を演奏したい」と、ずっと願っておりました。

更に今回、先生には委嘱作品をお願いしています。この日の為に書き下ろして下さった特別な曲に心躍る気持ちでおります。

野平先生との演奏はいつもより大きな道しるべを示して下さいます。私も大船に乗った気持ちで、デビューから40周年を応援して下さい皆様へのお礼と、私の演奏活動のこれからの第一歩を、どうぞこの演奏会でご堪能頂けると幸いです。

漆原啓子

Program

ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ

Debussy : Violin Sonata

プーランク： ヴァイオリン・ソナタ FP.119

Poulenc: Violin Sonata FP.119

* * * * *

野平一郎： 「一息で」ヴァイオリンとピアノのための 委嘱作品世界初演

Ichiro Nodaira: D' un seul geste pour violon et piano la première mondiale

フォーレ： ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ長調 Op.13

Faure : Violin Sonata No.1 in A Major Op.13

Program Notes

* 柿沼唯（作曲家）
☆ 野平一郎

C.ドビュッシー (1862-1918)

ヴァイオリン・ソナタ *

ドビュッシーは晩年、種々の楽器の組み合わせによる6曲のソナタの作曲を計画し、そのうちの3曲が完成したところで世を去った。その3曲目にあたるのがこの＜ヴァイオリン・ソナタ＞であり、文字どおりドビュッシーの遺作となった作品である。

作曲家としての出発点から、ドイツ音楽の流れとは一線を画したフランス人の感性による新しい音楽を目指して、独自の創作が続けてきたドビュッシー。そのドビュッシーが、「6曲セットのソナタ」というウィーン古典派の流儀で曲を書こうと計画したのは理由があった。1914年に勃発した第1次大戦がその愛国心をかき立て、今こそ彼らに対抗するフランス的なソナタを書いてやろうと意図したからである。大戦中の1915年に、これらのソナタは書き始められている。＜チェロ・ソナタ＞、＜フルート、ヴィオラとハープのためのソナタ＞に続く3作目のこの＜ヴァイオリン・ソナタ＞は、病の重くなったドビュッシーの苦闘の中で生み出されることとなった。そのことを示すかのように、曲はきわめて緊迫した構成がとられ、稀代の感性の作曲家に最後に残された凝縮した時間が、そのまま結晶したような作品となっている。

第1楽章アレグロ・ヴィーヴォ。 第2楽章「間奏曲」。 第3楽章フィナーレ。

F.プーランク (1899-1963)

ヴァイオリン・ソナタ FP.119 *

フランス＜6人組＞の作曲家の一人として知られるフランシス・プーランクは、幅広いジャンルに多くの作品を残したが、その音楽は20世紀の作曲家としては珍しいほどに、どれもが新鮮なメロディーとモダンな和声感覚にあふれている。弦楽器よりも管楽器を好んだプーランクに弦楽器のための作品は多くはない。そんなプーランクの室内楽のなかで、この＜ヴァイオリン・ソナタ＞は異色の作品となっている。飛行機事故のため30歳の若さで世を去った女流ヴァイオリニスト、ジネット・ヌヴェーの依頼を受けて、1942～43年に作曲されたこのソナタは、曲頭に「ロルカの思い出」の献辞が記され、フランコ政権により銃殺されたスペインの詩人、フェデリコ・ロルカの詩に靈感を受けて書かれた。第2次大戦中はレジスタンス運動にも参加したプーランクの、ロルカへの深い哀悼の気持ちが、生来の叙情的な音楽に悲痛な面持ちを加えている。

第1楽章アレグロ・コン・フォーコ。 第2楽章「間奏曲」。 第3楽章プレスト・トラジコ。

野平一郎 (1953-)

「一息で」ヴァイオリンとピアノのための 委嘱作品世界初演 ☆

漆原啓子さんのデビュー40周年リサイタルの委嘱作品として、2022年12月末から23年2月にかけて「一息に」作曲した。作品の冒頭にあるG線上のC（ハ）音の一瞬のクレッシェンドから、音型、和音、アイディアのすべてが派生していく。説明が不可能なほど、さまざまなアイディアが次から次へと現れては消えていくが、それらすべては一筆書きのように、ただ一つの身振りによって（フランス語のタイトルの“D’ un seul geste”）表される。もちろんどのアイディアや音型も、漆原さんの超高度な技術を頼りにしていて、またexpress.（表情豊かに）とスコアに書かれた瞬間がいくつもあり、彼女の美音を想定している。時には時間が止まったようなゆったりした動きと、素早く目まぐるしい運動が交互に繰り返される。ピアノは、ほとんどの瞬間でその音をヴァイオリンと共有し、前面に浮き出きたり、背景に引っ込んだりする。最後にピアノの低音で共鳴する鐘のような響きの上に、弱音器がつけられた旋律の、これも断片があらわれる。

G.フォーレ (1845-1924)

ヴァイオリン・ソナタ第1番イ長調 Op.13 *

香り立つようなリリズムと高貴な佇まいをそなえるフォーレの作品の中で、歌曲、ピアノ曲と並んでもっともその美質が表れているのが室内楽である。1875～76年、フォーレ30歳のときに作曲されたこの＜ヴァイオリン・ソナタ第1番＞は、彼がはじめて歌曲以外の純音楽と取り組んだ記念すべき一曲で、フォーレ初期の代表作として広く知られている。当時フォーレはマリアンヌ・ヴィアルドという女性と恋愛中で、その幸福感がこのソナタには反映されていると言われる。曲は、マリアンヌの兄弟で優れたヴァイオリニストだったポール・ヴィアルドに献呈された。

第1楽章アレグロ・モルト。 第2楽章アンダンテ。 第3楽章アレグロ・ヴィーヴォ。 第4楽章アレグロ・クワジ・プレスト。